

エッセイ

アスワン旅行記：ヌビアのラクダ

坂本麻紀

(国立スポーツ科学センター 司書)

はじめに

私は2023年の9月にエジプトを訪れ、中エジプトとアスワンの遺跡を見学してきました。エジプトの遺跡については別の機会に紹介したいと思いますが、今回は前回(2023年10月号「エジプトの夜行列車」)の続きで、アスワン滞在中に起こった出来事になります。

みなさんの中にも「自分は客引きなどに騙されたりしない」と思っている方がいると思います。実は私もその1人だったのですが、アスワンでは色々な客引きに騙され、何度も失敗をしました。ただ、騙されたと言ってもシリアスな話ではありませんので、気軽に読んでいただければと思います。尚、写真は全て筆者が撮影したものです。

エジプトは交渉社会

添乗員が同行する日本の旅行会社のツアーでエジプトを訪れた人々は、現地で交渉トラブルに巻き込まれたという経験はあまりないかもしれません。しかしエジプトではタクシーに乗る時も、お土産を買う時も、料金が決まっていない(表示されていない)ことが多く、その都度、料金を確認し、相手の言い値(大概高く言うてくる)に対して、料金の交渉をする必要があります。こういった交渉を面白いと感じる人もいるかもしれませんが、私は個人的にエジプトでの交渉が苦手です。土産物屋での交渉はまだしも、タクシーなどは乗車前に取り決めた料金よりも高く請求されることが日常茶飯事で、「取り決めと違うじゃないか」と相手に文句を言い、再度料金の交渉をするといった一連のやり取りにうんざりします。こういった交渉が何度も続くと、本当に疲れ、「もうタクシーに乗らなくてもいいや」と徒歩で移動するのですが、必ず客引きが「タクシー？」と声を掛けてきます。エジプトのタクシー運転手は、こういったやり取りを観光客相手に毎回しているなんて本当に元気だなあと感心します。

アスワンの立地と交通事情

アスワンはアスワン・ハイダムがあることで有名ですが、アスワンとルクソールの間をクルーズ船に乗って遺跡見学をしながら3～5日間で巡るナイル川クルーズの発着地としても有名です。エジプトは国土を縦断するようにナイル川が流れており、カイロ以外の地方都市ではナイル川の東岸と西岸を繋ぐ橋の数が少なく、対岸へ渡るための手段としてボート(渡し舟)が活用されています。アスワンの古代遺跡はナイル川の東岸、西岸砂漠、



図1 アスワン
(左が西岸、真ん中の建物は島に建つホテル)

中州、アスワン・ローダムとアスワン・ハイダムの間の島などに点在しており、タクシーだけでなくボートを利用しないとアクセスできない遺跡があります。ナイル川には大小様々な島があり、遺跡以外にもホテルやレストラン、公園、植物園（キッチナー島）などがあり、公共の渡し舟（モーターボート）とは別に、ファルーカと呼ばれる帆掛け船でナイル川に点在する島々を巡るクルージングが観光客に人気となっています。



図2 左：宿泊先のホテル（東岸にホテル専用の船着き場あり）、右：ファルーカ

アスワンのヌビア人

以前、アラブ調査室のスーダン遺跡紹介で「古代のスーダンの地理的な領域を指す言葉として研究者は『ヌビア（Nubia）』という用語を使用する」とお伝えしました。ヌビアの領域は、ナイル川第一急湍（現在のアスワン市の南側のセヘル島の近く）からスーダンのハルツーム辺りまでと考えられており、古代においてアスワンはエジプトとヌビア地域の境界に位置する重要な町でした。現在、アスワンには自分たちのことを「ヌビア人（Nubian）」と呼ぶ人々が住んでいます。彼らはエジプト人より肌の色が黒く、独自の文化や伝統を持っており、外見だけでなくエジプト人とは違う民族であることを観光客にアピールしてきます。ちなみに彼らの宗教はイスラーム教です。彼らの中にはアスワン・ローダムやハイダムの建設によって、住んでいた地域が水没したため、アスワン地域のナイル川西岸やナイル川に浮かぶ島に移住せざるを得なかった人も多くいるそうです。彼らが住む集落はヌビア村（Nubian Village）と呼ばれ、カラフルな色の壁や装飾を持つ家などが人気を呼び、ツアーなどが組まれて観光地化している場所もあります。



図3 左：第一急湍の看板、右：西岸の岩窟墓近くのヌビア人集落

私がアスワンで出会ったヌビア人たちは、ファルーカやモーターボートの船長、ラクダ引き、タクシーの運転手など観光客を相手に商売をしている人ばかりでしたが、彼らは皆、「I am Nubian. I am not Egyptian.」と、最初に会った時に必ず同じようなアピールをしてきました。「エジプト人は信用できないけどヌビア人だから信用できるよ」という意味で言ってるように聞こえましたが、私はその彼らに騙されたので（モーターボートの船長は良い人でしたが）、客引きは信用できないということを忘れてはいけないと思います。

西岸の遺跡クベット・エル＝ハワ

カイロから夜行列車の Talgo でアスワンに到着した後、最初に訪れた遺跡はナイル川西岸のクベット・エル＝ハワ（Qubbet el-Hawa）と呼ばれる岩窟墓です。ここには古代エジプトの古王国時代（Old Kingdom 2686-2181 BCE）¹と中王国時代（Middle Kingdom 2055-1650 BCE）の高官たちの墓があり、この遺跡の見学がアスワンを訪れた目的の1つでした。

西岸の遺跡に行くには川を渡る必要があり、公共の渡し舟であれば、5 LE（エジプトポンド。1 LE は約5円）で西岸に行くことができます。私は今回、ヌビア人船長のファルーカをチャーターして西岸へ行ったのですが、最終的に料金トラブルに巻き込まれます。このファルーカの話はまた別の機会ということで。



図4 左：チャーターしたファルーカと船長、右：西岸のクベット・エル＝ハワ

クベット・エル＝ハワの高官たちの岩窟墓は、直射日光が当たる壁面のレリーフなどは状態があまり良くありませんでしたが、墓の内部の壁画やレリーフは残りの良いものもあり、見学できて良かったです。ただ残念ながら、持参したカメラの調子が良くなく、写真があまり撮れませんでした。遺跡見学については別の機会に紹介したいと思います。



図5

左：ハルクフの墓

右：サレンプウト2世の墓

ヌビアのラクダ

岩窟墓の見学を終えて丘の中腹から麓へ降りると、ラクダ引きが待ち構えていました。ここから同じ西岸の聖シメオン修道院やアガハーン廟までラクダに乗って観光することができます。私はチャーターしたファルーカを待たせているため、「時間がない」と伝え、立ち去ろうとしたのですが、年配のヌビア人男性が「お茶でも飲んで行ったら？」と誘ってきました。今年のアスワンは9月でも日中の気温が46度まで上昇するくらい暑く、甘くて温かい紅茶が飲みたくなります。「ラクダは乗らないけど、お茶くらいなら飲んでもいいか」と思い、その男性の手招きに応じてお茶屋に入ることにしました。紅茶ではなく、アスワン名物のカルカデ（ハイビスカスティー）を注文し、くつろいでいると、さきほどの男性が「I am Nubian. I am not an Egyptian businessman.」と言って、お茶屋の中で私の写真を撮ってくれたり、庭に植えられている綿の木やグアバの木などの説明をしてくれました。あまりゆっくりしている訳にもいけないので、10分ほどでお茶のお代を払って行こうとすると、やはりラクダの話が始まりました。「時間がないから乗らないです」と言っているのに、「うちのラクダはヌビアのラクダだから他とは違う」と言い、「時間がないなら座っているラクダに乗って写真だけ撮ればいいんじゃないか？」と言ってきます。こういう場合、お金を取るに決まっているので、あとでトラブルにならないよう料金を確認する必要がありますが、料金を聞いても「No problem. I am not a businessman.」と言って教えてくれません。「危険だなあ」と思いつつも、「乗って乗って」と言われ、結局ラクダにまたがって写真を撮ることに…。



図6 左：カラフルなヌビア人のお茶屋、右：ヌビアのラクダ？に乗せられた私

またがって写真を撮るだけだと思っていたら、例の男性が「ちょっとだけラクダで歩いてみたらいいんじゃない？」と言い、ラクダ使いの男の子に指示を出し、ラクダを立ち上がらせたので驚きました。結局、年配のヌビア人男性の口車に乗せられ、20m くらいラクダに乗ってお散歩させられることに。そしてラクダから降りたところで、やはりお金の請求がありました。200 LE（約1,000円）とのこと。一応、お決まりのパターンで文句を言ってみたのですが、やはり男性のほうが一枚上手で、「200 LE は自分たちのためじゃなく、ラクダの草（エサ）代なんだ。うちにはラクダが4頭もいて、ラクダが草を沢山食べたがるんだ」とのこと。もう笑うしかないか、という感じでした。

おわりに

私はアスワン滞在中に色々な客引きに騙されたのですが、今回のヌビアのラクダ引きはちょっと笑える話です。騙されても笑い話にできるくらいの被害であれば良いのですが、高額な請求被害を受けた場合は本当に落ち込みます。私の場合、ファルーカのチャーターで高額請求をされたのですが、最初に取り決めた料金を途中で確認しなかった私にも落ち度があったと後悔しています。もちろん相手の言い値では払わず、交渉を行い、最終的に半額になりましたが、それでも想定の2倍の金額でした。観光地での料金トラブルはよくあることですから、「私は騙されない」と思っている、お金が絡む時には気をつけたほうが良いと思います。煩わしいことが多いので、やはり私はエジプトの交渉社会が嫌いです。でもエジプトは好きなので、次回もツアーではなく個人旅行で行こうと思っています。

¹ エジプトの年代については、展示図録「大英博物館ミイラ展：古代エジプト6つの物語」（朝日新聞社、c2021-2022）を参照しました。